

編集委員会を代表して 手島繁一

本邦初の大学院生運動史

本書は北海道大学における大学院生の運動の歴史をまとめたものである。大学院生の運動史の出版はおそらくわが国では初めての試みであらう。

本書の編集に携わったのは一九六〇年代後半から八〇年代に大学院生活を送り院生運動に参加した世代であるが、その時代はまた新制大学院の揺籃期ともいえる時期であり、大学院の理念や目的、制度、教育と研究の実践をめぐって、教員、職員、院生が時には厳しく対決するという緊張関係をはらみながら、議論や運動を積み重ねて大学院の内実を作ってきた時期でもあった。本書はこの時期を主な対象としているが、文書資料や関係者の証言・回顧を集成することによって、戦後から今日までの歩みを見通せるよう努めた。

新制大学院の発足と院生協議会の誕生

主として旧制帝国大学に限定的に置かれていた大学院は戦後の模索と混乱を経て、一九五三年から学士卒業生を受け入れる新制大学院体制がようやく整備され再出発した。とはいえ、新制大学院に対して独自の予算・施設・教職員

スタッフは手当てされることなく、研究教育条件は貧困をきわめ、他方、戦前からの権威主義的「教授会の自治」中心の大学運営や研究室の実態は、新憲法下で権利意識を高めた院生たちにとって民主化すべき課題として認識された。

北大においては、理学研究科や農学研究科で先行的に結成された院生協議会（大学院生会）が全学に広がり、五九一年に北海道大学全学院生協議会（北大院協）が誕生した。六三年には先に誕生していた全国組織の全国大学院生協議会（全院協）に加盟し、その有力な一翼となった。ちなみに、全院協は、（１）大学院生の生活条件・研究条件を守る、（２）自主的・民主的研究を推進する、（３）平和と民主主義を守る、という三本の柱を掲げた。

院生協議会という組織は、学生自治会のような全員加盟制ではなく親睦交流を目的として発足した自主的組織であるが、発足当初から奨学金、院生寮、就職などの共通の要求の実現をめざす運動組織としての性格をあわせ持つっており、早くも五九年には全院協代表と文部大臣との会見が行われるなど、大学内外において大学院生の代表組織としての認知度は高い。北大でも、全学および各単位院協は当初から交渉適格団体として認められている。

本書刊行の経緯に関わって

ところで、「本邦初の院生運動史」を標榜する本書はどのような経緯で刊行に至ったのか。直接の契機となったの

は、一九六〇年代後半から七〇年代初頭のいわゆる大学民主化闘争をテーマに、証言・回顧・史資料を集めた『北大1969』を編集刊行する作業だった。同書は二年ほどの時間をかけて二〇二一年一月に刊行された。この過程で、運動当事者が保持していたビラ、パンフレット、日記などの膨大な文書資料が発掘、収集されたが、学生運動を主眼とする同書では当然のことながら大学院生とその運動に関する資料はリストとして整理掲載されるにとどまった。収集された院生運動関係の資料は八〇〇点を超えていた。そこで、あらためてこれらの資料を読みこなし、院生運動の歴史をまとめる課題が提起されたのである。『北大1969』の編集委員会のなかには院生運動を担った者も多くいたことから、数カ月の準備期間を経て、二〇二二年四月の同書の出版記念会の翌日、本書の編集委員会が立ち上がった。編集委員会の半数は『北大1969』の編集委員会のメンバーである。

したがって、本書は『北大1969』と密接なつながりがあるが、院生運動の固有の性格にかんがみ、次のような特徴を持っている。(1) 対象の時代を、院生協議会の発足から一九九〇年代までと広く設定したこと、(2) 『北大1969』では扱えなかった教育学部・研究科、水産学部・研究科などの証言・回顧を収集掲載したこと、(3) 大学院および高等教育に関する政策動向を視野に入れ、分析や論評を加えたこと、などである。

とはいえ、本書が北大院生協議会の歴史を十全に語り得ているわけではない。編集委員会の構成がそうであるように、一九七〇年代の大学院在籍者の証言・回顧に偏重しており、学部や研究科も広く全学部や研究科を網羅したものにはなっていないなど、問題は容易に指摘できるであろう。なにより、現在の院生運動が直面する困難への処方箋が提示されていないとする批判はありうるだろう。

そうした批判は覚悟のうえで、本書は現代の問題を歴史的な視点からとらえ直し、ともに考える材料を提供したいと願っている。問題や困難は現前の事実ではあるが、同時にまた歴史的淵源を持つており、歴史的経験のなかに解決の見通しが見いだせるという思いを、わたしたちは共有している。

本書の構成

本書は大きく四部から構成されている。

第一部は通史編で、戦前から一九八〇年代までを対象として、北大の大学院制度の変遷と院生運動の歴史を八つの時代区分で叙述している。また、補論として九〇年代から現代にいたる大学院の変遷と実態を先行時代の経験との比較で批判的に分析している。

第二部は、理・工・薬・農・獣医・水産・教育・文・経済の各研究科の運動、および「白書」・院生寮建設・奨学金の三分野の運動を取り上げている。

第三部は、院生運動に携わった個人の回想・証言録で、各寄稿者の運動への関わりに止まらず喜び、悩み、怒りや悲しみなどが生き生きとつづられており、本書の白眉ともいえる貴重な記録となっている。

なお、第二部、第三部は主に個人の見解によるものであり、その責はそれぞれの筆者にある。

第四部は、資料・年表編で、『北海道大学大学院白書』、『大
学変革』、『北大院協規約』、『北大女子院生の会に関する資
料』など運動の節目節目で発行された重要文書、年表、ビ
ラ・パンフレットなど収集資料のリストおよび主要文献一
覧などが掲載されている。

本書および本書編集の過程で収集された諸資料は、いず
れ北大文書館に寄贈する予定であり、必要な整理を経て公
開閲覧が可能な状態になるであろう。

本書の公刊が、新たな探求と交流の広がりやさらなる歴
史の掘り起こしの一助ともなれば、これにすぐる喜びはな
い。

二〇二四年 早春

